

# 教員養成大学における模擬授業の系統的指導のあり方

—算数科及び社会科の実践をもとに—

山中 護

Systematic Guidance for Trial Lessons in the Teacher Education University :  
Based on the Practices of Mathematics and Social Studies

Mamoru YAMANAKA

キーワード：模擬授業 系統的指導 教員養成 算数科 社会科

## 1. はじめに

社会の変化に応じて様々な教育問題が生起している。小学校、中学校の教師に求められる資質能力の中で、授業力が重要とされている。学校で教師は毎日授業を行う。どのような授業を行うかにより、教室の空気が変わり児童生徒の表情も変化する。どの教師もよりよい授業を目指して日々実践している。しかし、現実には教師の満足できる授業はできない。教師が満足するのではなく、児童生徒が満足するという視点に立つとなおさらよい授業を行うことが難しいことを実感している教師が多い。

では、教師はその授業力をどこでどのように育成してきたのか。一般的に教師をめざす学生は教職課程をもつ大学で教員免許状取得のためにさまざまな科目を学び、結果として教師の資格を得る。

本研究では、教員養成大学における授業力育成について検討するものである。授業力についてさまざまな議論があるなかで、大学での模擬授業指導に焦点をあて、教員養成課程

において学生にどのような指導を行い、どのような力量形成を行っているのか。その現状と課題をふまえ、授業力の向上につながる基礎となる力を、模擬授業を中心に検討したい。

本稿では、次の章では教育現場で求められている授業力と教員養成課程で行っている模擬授業指導との関係について述べたい。授業力は、変化に対応できる力と普遍の力の両面があると考ええる。そこでは授業力とは何か、どのようにすればそれが育成できるのかを検討する。

第3章では、授業力の中で必要とされる3つの要素について検討しその力量を教員養成の段階でどのように育成するのか。また学生はどのように学んでいるのか、さらに教育現場で求められている力量との関係を検討する。

第4章と5章では、大学での模擬授業の実践をどのように行ったかを述べるとともに結果として学生がどのようにとらえ、どのような力量が育成されているか。学生の振り返りカードをもとに分析を行った。第4章では、1年次の科目「教育実習」で実施した算数科模擬授業について取り上げる。入学後初めての授業を計画

し実施した経験である。第5章では2年次科目「社会教育法」で実施した社会科模擬授業を取り上げる。模擬授業をどのように系統的に指導するかの視点から算数科も社会科も同じ学生を対象としている。したがって授業後の振り返りも1年次「教育実習」と2年次「社会教育法」は同じ学生が記述している。

さらに第6章では、1年次の模擬授業と2年次の模擬授業の振り返りを比較することで全体の変化及び個々の学生の変容を検討する。

## 2. 授業力とは何か

授業力についてはさまざまな議論がある。教育現場で行われている校内研修の多くは授業をどのようにすすめるか、各学校において研究テーマをきめて研修を行っている。中には研究した内容を公開する学校もある。その中で教師は、自分の授業力の向上を目指している。

一方、教育行政では各都道府県教育委員会（県教委）が授業力向上について施策や方針を明示している。実際には公立小中学校では県教委が県教育資料として各校に配布している。その中で現在求められる授業力としてどのようなものがあり、教育現場でどのように指導していくのか、その方針とともに具体的な資料も掲載している。また、県教委の指導方針を受け市町教育委員会も同じく市の教育施策の中に授業力の向上を記述している。中心は社会の変化に対応する授業力である。

教育行政の中で、文部科学省は授業力をどのようにとらえているのであろうか。「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（中教審答申、平成24年8

月）によると次のような記述がある。

「これからの教員に求められる資質能力は以下のように整理される。これらは、それぞれ独立して存在するのではなく、省察する中で相互に関連し合いながら形成されることに留意する必要がある。

（i）教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）

（ii）専門職としての高度な知識・技能

・教科や教職に関する高度な専門的知識（グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む）

・新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力）

・教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力

（iii）総合的な人間力

（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）」

ここでは、教員に求められる資質能力の3点を示し、その中に授業力として、専門的な知識技能とともに実践的指導力を指摘している。

同答申（H24.8）では、初任者の課題として次のよう記述がみられる。

「初任者が実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身に付けていないことなど

が指摘されている。こうしたことから、教員養成段階において、教科指導、生徒指導、学級経営等の職務を的確に実践できる力を育成するなど何らかの対応が求められている。」

初任者に実践的指導力が十分身に着けていないこと、教員養成段階での指導改善が必要であることも指摘している。実践的指導力について各大学では教育課程を編成し、授業を行っている。しかし、この答申で指摘している通り教員養成段階での大学の授業のあり方に課題があるのではないかと考える。

さらに、同答申（H24.8）の中で、養成課程における改善の方向性として次の内容がある。「教科に関する科目については、学校教育の教科内容を踏まえて、授業内容を構成することが重要である。そこで、例えば、「教科に関する科目」担当教員と「教職に関する科目」担当教員とが共同で授業を行うなど、教科と教職の架橋を推進するなどの取組が求められる。併せて、教科教育学の更なる改善も必要である。特に、教員養成系以外の課程における教科に関する科目については、全学的組織である教員養成カリキュラム委員会等の組織を活用し、担当教員に対し、教職課程の科目であることを意識して展開することを徹底することが必要である。」

注目したいのは、大学教員間の連携をふまえた改善が必要だとの指摘である。

これらの中教審答申の内容を受け、筆者は教員養成段階で授業力の向上を目指すためには模擬授業の指導が重要だと考えている。なぜなら、授業力は授業をしないとつかない力

量であると考えているからである。いくらすぐれた計画があってもよい授業とならない。よい授業とは児童と教師で作り上げるものである。授業は経験しないとわからないことが多い。では、教育現場で実践をしながらその力量を高めるとしても、その基礎は教員養成大学で行うべきものである。

一般的に教科に関する科目を基礎として、その上に教職に関する科目として教育法が位置付けてある。なかでもその科目の中で取り上げられる模擬授業は教育に関する学びを深めそれを実際に生かし、教育現場で行う授業の基礎を学ぶ科目となる。そのことは教育現場での教育実習を充実したものとするために極めて重要であるといえる。養成段階での模擬授業指導のあり方が直接教育実習の学びに大きく影響を及ぼす。

筆者は、教育実習指導として小学校を訪問し学生を指導するが、実習生を指導する現場の先生方からある程度の指導の経験がないと現場での負担が大きくなる。学習指導案が作成できる、授業をすすめた経験がある、など教師としての基礎的な経験の必要性が現場側から求められている。

一般的に教員養成の場である大学において、学習指導案の作成指導もそれをもとにした模擬授業の指導も行われている。しかし、中教審答申で指摘のあった通りその指導は十分なものでない。ではどのような教員養成段階で課題があるのだろうか。

科目の中で位置づいている模擬授業指導の課題は学習指導案の作成に重点が置かれ、それをもとにどのような授業展開をするか、どんな

教材教具を準備するか、準備した発問に対して児童がどのように反応するかなど、学生が経験を通しての考えることが不十分である。

そこで、筆者は大学における模擬授業指導をどのようにすればよいか、目指す授業観の確立、教材研究、指導技術の3点について、2つの事例をもとに、現場につながる授業の基礎作りである模擬授業のあり方を検討したいと考える。具体的には1年次の模擬授業指導と2年次の模擬授業指導を関連させ系統的な指導のあり方も検討する。

### 3. 授業の基本的な力

大学で模擬授業の指導を行う上で、筆者は次の3点が重要であると考えます。1つは目指す授業像を明確にすること、2つは教材研究の基礎を身につけること、3つは授業を行う上での基礎的な指導方法を身につけることである。

#### 3.1 目指す授業像の明確化

学生が授業を行ううえでどのような授業を目指すのか、十分な認識が必要である。これまで自分の受けてきた授業を振り返り自分はどの受け止めてきたのか、どのように感じてきたのか、児童の立場から授業を思い返すことである。学生自身の経験をもとに考えさせた。

ある学生は「小学校時代の教科について思い出してほしい」との筆者の問いかけに、「全くその教科の記憶がない、どんな内容を学んだのかわからない」と答えた、そして他の学生が楽しそうにその教科を振り返っているのを聞き、悲しい気持ちになり小学校教員を目指している自分に不安を覚えたという。その学生は大学の授業に積極的に参加し教員にな

りたいという意欲の高い学生である。また、別の学生は小学校時代の担任から「この教科は暗記だからね」と指導を受け、その学生はとにかく知識を暗記してきたのである。すべてとは言わないが、学生が小学校時代に受けてきた授業に課題があると考えます。児童主体の授業ではなかったのではないかと。

そこにはどのような授業をめざすのかという授業観の確立が大きく関連している。重要なことは、児童が自分で考える授業を目指すことである。「教師が考えさせた授業」でなく、「児童が考える授業」である。児童が学習内容について自分の考えをもち、友達と議論をし、考えを深める授業である。この授業観は教育現場で求められている問題解決的な学習につながっている。ある面、普遍的な考え方である。こうした授業観を担当教員が押し付けるのではなく模擬授業をととして学生が実感して学ぶことである。その経験が現場で目指す授業のあり方の基礎を決めるのである。授業観は模擬授業という実践を通して学ぶものである。

このことは模擬授業の課題で述べたとおり模擬授業を行うためには、目指す授業観が明確であることが重要となる。そうでなければ、形式的な指導となり現場で通用しない。つまり、あくまでも目指す授業を行うための指導案の作成であり、教材研究であり、授業の進め方である。目的と方法を明確にしなければならない。

#### 3.2 教材研究の基礎的方法

養成大学では、教科に関する科目で、教材とは何か、その教科の特性、教科内容等を学ぶ。しかし、授業づくりの基本については学ぶ機会

は少ない。授業を行う上で重要な点の一つが教材研究である。児童に何を教えるのか、どのように教えるのか、その根拠となる学習指導要指導の内容の扱い、そのうえで教科書研究がある。指導内容の関連性と系統性について明確にしていき、授業者の指導内容理解が求められる。

### 3.3 指導技術

指導技術として次の3点がある。1つは教師の話し方である。教師の話し方は授業を進めるうえで基本の技術である。どのような表情でどんな内容をどのような順に話すのか、児童が興味をもつ話し方はどんなことが重要かである。また、教師の明るさや元気のよさは児童の意欲を高めることにつながる。児童の学ぶ意欲を高めるためには教師の伝えたいという思いが児童に伝わるのが大切である。

2つは、発問である。発問は授業を進めるうえで重要である。なぜなら発問の質で授業の質が決まるからである。教育現場で、先輩教師から若い教師への指導に「教師の発問は児童への質問ではありません。」とよく聞く。教師の発問はねらいをもとに指導の意図を明確にしているかである。意図的な発問ができることは授業力の基本である。さらに、すぐれた発問は教材研究と児童理解に関連している。この二つの要素の理解の深さにより発問の質が決まってくる。児童の思考の深まりは発問に大きく影響される。

3つめの板書については、指導内容を明確にするためにあらかじめ教師が準備するものであり、その場の思い付きで行うものではない。児童の思考が深まるのも、何を学んでいるか

児童に明確にするのかも、板書の質による。この点において発問とともに板書計画はよい授業を行ううえで重要な点となる。

これらの3つの指導技術については、実際に模擬授業を通して学生がその学びを深めることができる。学生は児童役と授業分析をする教師役の2つを同時に体験しながら、模擬授業を受けている。教師としてどのような話し方をし、発問をして板書しているのか、児童役自分は授業に引き込まれているのか、客観的にみている。つまり、この模擬授業では、学生は同じ学年の仲間が行う模擬授業を児童役として受けながら、一方では教師として今の発問はよかったのか、児童には難しかったかなど学びを深めている。瞬時に振り返ることができる。

これまで述べてきたことをもとに次のように模擬授業の系統的な指導内容を整理したのが表1である。1年次と2年次の指導内容は明確に分かれるものでなく、連続して指導し深めていく内容となる。

表1 模擬授業の系統的指導内容

	1年次	2年次
目指す授業観	授業の基本 目指す授業の基礎	自分の考える授業 目指す授業の具体
教材研究	教材研究の方法 学習指導要領の読み方 教科書研究	教材研究の深さ 内容の系統性・関連性 他社の教科書との比較
指導技術	教師の話し方 発問の基本 板書とは何か	効果的な話し方 発問と授業の流れ 思考を深める板書
授業の進め方	教師中心から活動中心の授業	活動中心の授業 子ども同士の学び合い
その他	学生が小学校のとき受けた授業の振り返りにより授業を考える	2年次教育実習の経験をもとに授業を振り返る



#### 4. 1 年次における模擬授業

##### 4.1 模擬授業の位置づけと指導の観点

1 年次の模擬授業は後期科目の教育実習Ⅰ受講した小学校教員を希望する学生を対象に筆者が実施した。初等教育コースの教育実習科目は、教育実習Ⅰ・教育実習Ⅱ・教育実習Ⅲがある。教育実習Ⅰでは、1 年次で実施する観察参加実習（1 週間）の事後学習及び模擬授業を中心に計画している。教育実習Ⅱは 2 年次前期に位置づけ、教育実習Ⅲ（2 年次 3 週間の教育実習）の事前事後指導が内容としてある。

このように 2 年間の教育課程の中で位置づけられた教育実習科目の中で、1 年次に模擬授業を計画し全員が学習指導案を作成し、実施している。この模擬授業は 1 年次観察参加実習（9 月）の経験をもとに入学後初めての経験となる。2 年次にある各教科教育法の中で実施される模擬授業の事前学習とともに 2 年次 5 月～6 月に実施する教育実習の授業研究の基礎となる学びとして位置付けている。

この模擬授業では、算数科の授業を取り上げた。その理由はどの学年においても授業があり指導内容が明確であるからである。次の 3 点を重点に指導した。

1 点目は目指す授業像を明確にすることである。どのような授業を目指すのか、個々の学生の目標でなく、この授業を受けている学生の共通目標として「児童が考える授業」を目指した。2 点目は教材研究の基礎的方法を学ぶことである。どのような資料をもとに学習指導案の作成をするのか。どんな視点で教材を理解し授業にまでつなげるか。3 点目は指導技術として教師の話し方、発問、板書を取り上

げた。教師の話し方は教師としての基礎的な力として必要である。明確に伝えること、子どもたちに何を伝えどのように活動させるか、その基礎を学ぶ。発問では、初めて発問という用語を知り模擬授業を通してその重要性を認識させる。板書は、小学校での指導なかで大きな位置づけがなされ、授業者が教材内容を整理しどのように授業をすすめるかが明確になる。発問と板書は教材研究と関連が深いことは言うまでもない。

##### 4.2 指導の実際

1 年次の模擬授業を次のように行った。

表 2 1 年次模擬授業の概略

・科目名	教育実習Ⅰ（1 年次後期）
・受講者	H26 年度 初等教育コース 1 年 16 名
・実施時期	1 年次 11 月～12 月
・主な内容と方法	: 教科は小学校算数教科 1 年～6 年の内容 : 模擬授業の計画（全体） : 単元の決定（全体） : 学習指導案の作成（受講者全員・個人） 担当教員による指導案の添削 : 指導案の検討（グループ） : 模擬授業実施 1 回 3～4 名 一人 20～25 分の授業 : 指導の振り返り（個人）提出 : 模擬授業から学ぶこと（全体）

平成 26 年度 1 年次の学生 16 名を対象に 1 年次後期に実施した。前述したとおり学生は地域の公立小学校において観察参加実習（9 月、1 週間）を体験している。ほとんどの学生は、学年は異なるが算数科の授業を実際に観察している。授業に流れや児童の反応も実習ノートに記録している。学生は教育実習として小学校のクラスで過ごす初めての体験となった。

どの学年の単元を模擬授業で取り扱うかに

については、原則として観察参加実習の担当学年の指導内容を扱い、算数科の4つの領域「A 数と計算」「B 量と測定」「C 図形」「D 数量関係」を考えどの領域の単元も入るように計画した。つまり、16の単元が一つの領域に偏ることなく可能な限りバランスよく配置した。

学習指導案の作成については、入学後初めての経験となるので、一般的な形式を示して内容と記述方法の詳細を指導した。作成の資料としては学習指導要領解説算数編、教科書・指導書等を中心として提示した。また、指導案作成にともなって板書指導及び教材教具の作成についても具体的な指導を行った。

学生は学習指導案を担当教員に1回目の提出し、担当教員による添削を受け、それをもとに同じ時間に模擬授業を行うグループ(3名～4名)で指導案検討会を実施した。担当教員はこの検討会で学生が行う授業のイメージが明確になるように討議を進めた。また、単元の指導内容をもとに発問の内容や方法、板書の具体、教材教具の作成について話し合いをした。その後、学生は検討会で課題となった点を修正した最終指導案を担当教員に提出した。授業の空き時間等を利用して模擬授業の練習をしたグループもあった。

模擬授業では、1年次学生が児童役となり、また、毎回、初等教育コース2年次の学生3名～5名が参加した。1時間(90分)で3名～4名が模擬授業を行うので、一人の持ち時間が25分から30分である。最後の5分間は参加した2年学生が自分たちの気づきを発表し、その後担当教員が短時間でまとめをおこなった。2年次の学生はカード(よかったところ・改善

すべきところ)に書いて1年生授業者に渡した。

#### 4.3 指導の結果

受講者全員16名が模擬授業を5回にわたって行った。模擬授業の経験をどのように学生自身がとらえたか、反省と課題として800字程度のレポートを提出させた。以下、抽出した学生7名の振り返りを要約して掲載している。

##### 学生 A

- ・授業者がその単元について正しく理解し児童に理解できるような授業をすることが大切だ。
- ・本時で気付かせたかったことを明確にしていたが活動に時間をかけすぎ予定通り進まなかった。
- ・発問に対してある程度予想していたが、それを上回る答えが返ってきてとまどった。どこからどんな質問がとんできてでも答えられる学習が必要だった。
- ・板書はそのまま児童のノートになるので大事なものであり、わかりやすい板書をめざす。
- ・教師と児童が1対1対応でなく、教師対全児童になるような授業をしたい。

##### 学生 B

- ・導入の時間が長くなったのは、授業の前提を明確にしていなかったからだ。
- ・児童と一緒につくる授業でなく教師の教えるだけの授業になってしまった。児童の発言の取り上げ方がわからず教師の答えてほしい内容に誘導していた。
- ・模擬授業について仲間と学び合いながら成長をしていきたい。

学生 C

- ・ 児童自ら考えさせ発見させる授業の難しさを実感した。
- ・ 具体物をいつどのように出すのかタイミングがむずかしかった。
- ・ 児童に考える時間をどうとるのか、少ないと思考が深まらない、その時の児童の反応をよくみることだ。
- ・ 今回の模擬授業は自分が楽しんでできた。声も大きくはっきりしていた。

学生 D

- ・ 授業の流れは頭の中でイメージできていたが、板書の整理ができていなかった。
- ・ 児童への言葉を気にしすぎたため伝わりやすい話し方を工夫することができなかった。
- ・ 発言してくれた児童の言葉をもっと全体に広げればよかった。そうすれば児童とのやりとりがうまくいくと思った。
- ・ 児童がノートに書いているとき静まり返った状況になり、もう少し待った方がいいと思いながらも発問してしまった。
- ・ 実際に授業をしなければわからないことが多くあった。

学生 D

- ・ 初めての模擬授業はあっという間におわった。しかし事前に練習したとおりにかずハプニングだらけの授業になった。
- ・ 何気なくしている教師の話す言葉には伝わり方が何通りもあると実感した。もっと考えて言葉を選ばなければならない。

- ・ 今回は大学生相手だったが、実際に児童に授業をしたらどんな反応をするのか考えていきたい。

- ・ 一回の模擬授業でたくさんの発見があり先輩からのアドバイスもあり、やってよかったと思った。

学生 F

- ・ 指導案を作成して思ったことは、1年の学習内容が6年の内容までつながっている。
- ・ 発問して児童が挙手できないとき、その原因が何かを理解してすぐに追加の発問をするなど別の働きかけをしていきたい。
- ・ 自分がふだん使っている言葉でなく、その学年の児童にわかりやすい言葉で話すことを意識した。

学生 G

- ・ 一番の反省は学習課題が児童に理解できなかった。前時までの学習の流れをつなげていく工夫をすべきだった。
- ・ 児童が発言しやすい雰囲気教師がつくることが大事だと感じた。
- ・ 児童の意見を正しいかどうかでなく、なぜそう考えたかを発言できること、またその考えを受け入れられる学級づくりが重要だ。

抽出した学生の記述によると全体として次のことが言える。学生はさまざまな角度から自分の模擬授業を振り返っている。その中で、学生はどんな授業を目指すのかを意識した記述がみられる。例をあげると、学生 B「児童と一緒に作る授業でなく教師の教えるだけの



授業となった」、学生C「児童自ら考えさせ発見させる授業の難しさを実感した」などがある。教材研究に関しては、学生Aは、「教師がその単元について正しく理解し児童に理解できるように授業をすることが大切である」と記述している。その他にも、発問に関する記述、授業の進め方等に関する学生の気づきがみられた。また授業は教師の思うようにいかないことを実感している。さらに、意欲的に取り組み自分の次の課題も明確にしている。

模擬授業を肯定的にとらえている背景には、仲間とともに共に学ぶこと、2年次の先輩にアドバイスをもらっていることがあげられる。

## 5. 2年次における模擬授業

### 5.1 模擬授業の位置づけと指導の観点

2年次の模擬授業は前期科目の社会教育法を受講した小学校教員を希望する学生13名を対象に筆者が実施した。この科目は初等教育コース1年次の科目「社会」と関連しており、2年次前期に位置づけられている。また前期には教育実習Ⅲ（2年次3週間の教育実習）が5月末から6月上旬に行われる。

このように2年科目社会教育法の中で、模擬授業を計画しグループで学習指導案を作成し、実施している。この2年次の模擬授業では、実習経験を生かした模擬授業指導に重点を置いた。ただし、実習での授業体験はあるが、すべての学生が社会科の授業経験をしていないのでその点は配慮した指導を行う。教科の特性としての社会科指導のあり方を、模擬授業をとおして実際に経験させる。次の3点を中心に指導をした。

1点目は目指す授業観を明確にすることである。とくに、社会科の教科の特性をふまえたうえで、児童に自分の考えを持たせにはどうするか。資料のあり方はどうか、児童の考えを交流する方法や根拠をもとに発言させるにはどうするかを中心に指導した。社会科は暗記科目でなく、児童に考えさせる授業であることを学生に気付かせる指導をした。

2点目の教材研究の基礎を学ぶことでは、学習指導要領の内容をおさえ、教科目標・学年目標及び指導内容を中心に考えさせた。教科書をどのように扱うか、教科書資料を活用するのか、教師が資料を作成するのか。教科書資料の意味もあわせて考えさせるようにした。

3点目は指導技術として教師の話し方、発問、板書を取り上げている。教師の話し方は教師としての基礎的な力として必要である。1年次と同じ内容である。しかし、明らかに違うのは実習3週間の経験をしてきたことである。学生は、発問をこれまで受けた大学の授業の中で大切だと感じているが、教育実習によりさまざまな教科の発問を見たり聞いたりしているので、この模擬授業を通してその重要性をさらに認識させたい。板書は、小学校での指導なかで大きな位置づけがなされ、授業者が教材内容を整理しどのように授業をすすめるかが明確になる。

## 5.2 指導の実際

2年次の模擬授業指導を次のように行った。

表 3 2年次模擬授業の概略

・科目名	社会教育法（2年次前期）
・受講者	H27年度初等教育コース2年 13名
・実施時期	2年次6月～7月
・主な内容と方法	<p>：教科は小学校社会科 3年～6年の内容</p> <p>：模擬授業の計画（全体）</p> <p>：単元の決定（全体）</p> <p>：学習指導案の作成（グループ）</p> <p>担当者による指導案の添削</p> <p>：模擬授業実施 代表者（3グループ）</p> <p>1名が30分の授業を行う</p> <p>全体で簡単な協議を行う</p> <p>：指導の振り返り（個人）</p>

平成 27 年度 2 年次の学生 13 名を対象に 2 年次前期に実施した。前述したとおり学生は公立小学校において教育実習（5 月～6 月、3 週間）を体験している。学生の中には社会科の授業を実際に行った経験をもつ学生もいる。しかし低学年に配属された学生は社会科の授業を観察している程度であり個人差がある。そこで、模擬授業は 1 年次の指導と異なり少人数のグループでの活動を中心とした。

どの学年の単元を模擬授業で取り扱うかについては、原則として 3 学年～6 学年まで模擬授業を計画し、そのうち 3 つの授業を行うことにした。どの単元を扱うかはグループで決めて協力して活動した。

学習指導案の作成については、一般的な形式を示して内容と記述方法を指導した。教材研究の資料は、小学校学習指導要領社会編、教科書・指導書等を中心とした。授業の中で

扱う資料も自分たちで調べて作成した。学生が提出した学習指導案は科目担当が添削し指導した。1 年次の模擬授業でおこなった授業の進め方について事前協議は行わず、あくまでの学生が中心となって協力し教材教具の作成・板書計画を行った。

## 5.3 指導の結果

模擬授業のレポートを学生に提出させた。内容として 1 点目は教材研究のポイント、2 点目は模擬授業を通して学んだことである。抽出学生 7 名は 1 年次と同じである。

### 学生 A

- ・教師が目標を明確にもち、児童に何を伝えたいのか、どんなことに気付かせたいのかしっかり考えて教材研究をしなければならない。
- ・地域の実態に応じた学習内容に気を付けた。教科書の内容と地域実態に大きな差があり、児童に身近に感じさせる工夫が必要だ。
- ・社会科で大切なのは児童に興味関心をどのように持たせるために、どんな工夫を教師がするのか。
- ・授業者が学習内容をしっかり理解すること。わかりやすい内容と板書、児童が興味をひくような工夫が必要である。
- ・模擬授業でわかったことは、授業は計画どおりいかない、どんなに教材研究をしてもどんなに発問の反応を予想しても予想していない反応がある。それを授業者がどのように生かすか大切である。

学生 B

- ・社会的事象を児童の目に見えるようにすることが大切である。ただ見たり聞いたりしたことだけでなく、子どもの生活とかかわらせることで自分のこととしてとらえさせたい。
- ・資料は児童の視点にたって用意し、何に気付いてほしいのかそのためにどんな資料にするか。
- ・児童が疑問をもつような指導をする。そのためには教師が興味関心を示し疑問の生まれる情報を探す必要がある。
- ・グループで教材研究をしたが、疑問をどのようにもたせるか、学習内容の理解が大切であり、それがなければ注入する授業になる。
- ・他のグループの模擬授業を見たが、みんなの導入がうまくなっている。具体物を用い児童の生活にかかわらせると児童の目がキラキラすると気付いた。教材研究の大切さが身にしみた。

学生 C

- ・教師がその教材に興味を持つことである。教師自身が興味を持てばその教材に児童が興味を持たせることができる。
- ・その社会的事象がおきた理由をしっかりと教師が考えることである。教材からでは足りない情報を集め、児童の学ぶ内容の厚みや濃さを変える。
- ・児童の疑問などを予想して資料を用意する。児童の疑問にすぐ答えを出すのではなく、資料から考えさせ表現させることが大切だ。
- ・自分の苦手な社会科だったが、興味をもつことで少しずつ面白くなり考えが少しだけ深

まった。このことは児童にもいえることだ。

学生 D

- ・その単元で何を教えたいのか明確にしておくべきである。そのために学習指導要領を熟読し、かみくだくが必要である。
- ・疑問をつくることである。疑問がなければ学習にならない。すぐにわかる疑問でなくなかなか乗り越えられない疑問がうまれることで深く考える力が身につく。
- ・児童の反応を予想することである。児童の発言を予想し資料を用意したり発問を用意したりすることで考える社会になる。
- ・社会科は覚えることが多いが、教え込まれたらつまらないだろう。授業展開を考えるうえでどうやって気付かせるか、何を教えどこまで考えさせるかが大切だ。
- ・当たり前をどうやって疑問に変えるか、当たりの前は実はあたりまえでないことに気付かせるのも社会科の役割である。

学生 E

- ・児童に自分の生活や考えと比較させて、それがどのように違うのか、どうかかわっているのかを考えさせることだと思う。
- ・資料を提示し活用するためには教材研究が大切だと思う。
- ・児童に自分たちで調べる活動を取り入れることで、児童が意欲的に学べるし学び合いができる。そのために教師が単元の内容をきちんと理解し調べて教師だけが満足のいく授業にしていけない。
- ・社会科の授業では資料が大切である。地域単

元の資料は自分たちで用意するしかなく、難しい。

・グループ活動を多く取り入れ児童の仲間づくりを築き深められることができる教科であると思う。

学生 F

・社会の教材研究のポイントはねらいを明確にすることである。

・児童に教える内容をしぼり、教師自身が教材研究をして、さまざまことを授業で教えながら児童に自分で解決させるようにすることが大切である。

・児童に教える内容よりも3倍以上教師は学んでおく。教師が他学年や他教科との関連も含め系統的に内容を理解しておくことで児童の個人差に合わせて支援ができる。

学生 G

・児童に他人事でなく自分のこととして考えさせるため、子どもの身近な問題・事象につなげることが大事だ。

・児童が疑問や不思議を感じられる教材にする。疑問や不思議を児童自身が感じるたり発見したりすることで学びたいという意欲につながる。

・多面的にとらえられる教材にすることにより考えが一つになるのではなく、あらゆる角度から考えるようにし、あらゆる意見に出会うことの面白さを感じてもらう教材にする。

・社会科の授業では、児童に知識をつめこむのではなく、考えさせる授業を行うことが大事であることは理解ししていたが、実際に指導案

を作り授業をするなかで、何を考えさせるかが大切であることを実感した。

・社会科の授業では、「こう考えることが正しい」を教えるのではなく、さまざまな角度から物事をみたり、また、人の意見を聞いて自分の考えを深めたりして最終的に何が正しいのか自分自身で判断できるようにする教科だと思う。

2年次の学生の振り返りは、全体として、1年次と比較し振り返りの内容が具体的になっている。目指す授業観の確立では、「児童が考える授業」「疑問を多く持たせる授業」「児童に知識をつめこむのではなく、考えさせる授業」「教え込まれるとつまらない」など児童が考える授業のイメージが具体的になってきた。

そして、そのためには教材研究の重要性を認識している。「学習指導要領を熟読し、かみくだくことが必要である」「児童に教える内容よりも3倍以上教師は学んでおく」「児童が疑問や不思議を感じられる教材」「多面的にとらえられる教材」などの記述が多くみられる。さらに、社会科という教科の特性をとらえた記述がみられた。つまり、教科の特性をもとに目指す授業観が明確になりつつある。

## 6. 考察

同じ学生が2つの模擬授業をどのように受けとめているか、その記述内容に変容や深まりがあるのか、次の2点について検討したい。

### 6.1 授業の基本的な力

前述した授業の基本的な力としての3点について学生の振り返りをもとに考察してみた

い。目指す授業観の確立では、児童が考える授業を意識した内容が2年次にみられる。社会科学という特性もあるが疑問を多く持たせる授業、すぐ疑問に答えるのではなく考えさせる授業の重要性を指摘している。たとえば、学生Gは「社会の授業では正しいことを教えるのではなく、さまざまな角度から物事をみたり、また人の意見を聞いて自分の考えを深めたりして最終的には何が正しいのか自分自身で判断できるようにする教科だと思う」この記述は授業の本質にかかわる重要な点に関する気付きである。

教材研究では、学生Bは「具体物を用い児童の生活にかかわらせると児童の目がキラキラし、教材研究の袋瀬悦だに身にしみた」ととらえている。目指す授業観をもちそのための教材研究の大切さにつながっていることは重要である。単に技術としての教材研究でなくこんな授業がしたいから教材研究を深くするという意味である。指導技術では、発問を考えるとときに児童の反応を予測して考える点を振り返っている。予測しても授業の難しさを実感している。

学生の個々の変容については次の点が指摘できる。学生Bは1年次で「模擬授業について仲間とともに学びあいながら成長したい」と振り返り、2年次では、「他のグループの模擬授業を見たが、みんなの導入がうまくなっている」と指摘している。同じ仲間と一緒に授業をつくっているという意識が育っている。また、自分たちの成長に気づくことは、課題も明確になる。模擬授業を行う仲間の意識に触れている。

学生Cのように「自分の苦手だった社会科学だったが、興味をもつことで少しずつ面白くなり考えが少しだけ深まった。このことは児童にもいえることだ」と記述している。社会科学は暗記教科であるとか、苦手教科という意識をもった学生が模擬授業を経験することで少し変化しており、教育現場で児童に伝えることができ自信にもつながっている。

同じく学生Cは、1年次には「児童自ら考えさせ発見させる授業の難しさを実感した」と記述しているが、2年次では児童が考える授業をめざすために「教師がまず教材に興味をもつこと」「児童の疑問にすぐに答えをだすのではなく、資料から考えさせることが大切だ」と具体的な方法にまで踏み込んでいる。

さらに、大学での授業でも共通して重要なことは繰り返し指導することにより定着する。個別の科目で独自に指導するのではなく、模擬授業においては大学教員の関連的指導をおこなう必要がある。そのことにより学生に授業に対する考えが深まりや発問や板書の技能も向上する。

## 6.2 系統的な指導のありかた

本稿で最も明らかにしたかった点が模擬授業における系統的な指導の有効性である。2つの実践は同じ担当者が指導している。表1にまとめているように指導内容の系統性を意識した指導を行ってきた。学生の意識の変容を振り返りから読み取ることができた。授業についての考え方や見方が深まってきた。

しかしながら、系統的な指導が十分に機能した結果としての変容と言えるのかという疑問が残る。今後はどのような系統的な指導が



変容につながったのか明確にできるような、学生の意識調査等の工夫が必要である。

## 6. おわりに

本稿では、教員養成大学での模擬授業のあり方について、同じ教員が2学年にわたり同じ学生に指導した実践を検討した。指導内容を関連させたり一貫性を持たせたりすることで学生の意識に変化が見られた。

特に、学生が目指す授業観が明確になってきた。このことは大学教員が目指す授業観をどのように確立するかに関連してくる。教員養成大学の授業は学生にとって大きな意味をもつことになる。大学の教員が目指す授業を目的としてとらえ、その方法として教材研究や指導技術を検討していく。模擬授業の指導は大学教員の授業を振り返ることにつながる。

課題として、1点目は系統的な指導を行うために科目担当教員間の模擬授業指導に関する連携が必要である。模擬授業にかかわるすべての教員が模擬授業の目的を明確にした情報共有が求められる。大学として委員会を設置するなどの方法を検討する必要がある。中教審答申（H24.8）においても教員間の連携についての指摘がある。

2点目は研究方法として学生の変容をどのようにとらえるかについて明確にする。学生の振り返りとしての自由記述だけでなく、アンケートを実施しその変容を明らかにしその要因を探る必要がある。そして模擬授業の実践が授業力の育成にどのように関連するのかを明らかにしたい。

## 参考文献

・中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（平成24年8月）